シオニズムの考古学

現代ユダヤ社会におけるディアスポラとイスラエルの相克

報告者：赤尾光春（人間科学研究科特任助教）

1.　参加メンバー

代表者：赤尾光春（大阪大学）

事業推進担当者：三谷研爾（大阪大学）

連携研究者：池田有日子（京都大学）、臼杵陽（日本女子大学）、椿原敦子（大阪大学）、鶴見太郎（東京大学）、野村真理（金沢大学）、早尾貴紀（東京大学）、森まり子（東京大学）

2. 趣旨と目的

本研究プロジェクトの目的は、ユダヤ人社会内部における文化的／宗教的／政治的イデオロギーの多様性や対立関係に焦点を当てながら、今日のイスラエル／パレスチナ紛争の起源としてのシオニズム運動を批判的に再検討することである。

とりわけ、ユダヤ的伝統の中につねに脈打ってきたディアスポラの肯定論と否定論との緊張関係が、19 世紀末のシオニズム運動の胎動期からイスラエルの建国を経て現在に至るまでに、いかなる変容を被ってきたのかを、1）ユダヤ教とシオニズムの相克、2）シオニズム運動の内部対立、3）ユダヤ人社会内におけるシオニズムと他の世俗的思想運動（社会主義、文化自治主義、リベラリズム等）との覇権をめぐる争い、という三つの対立軸から跡づける。さらに、イスラエルへの帰還と建国という、近代国民国家思想に裏打ちされた目的論的なシオニズム史観の脱構築し、新たな歴史像の提示を目指す。

また、これらの作業と並行して、領土国家や政治的覇権に基づかない脱領域的な文化的アイデンティティの追求という、ディアスポラ・ユダヤ文化に歴史的に見られた反／非シオニスト的局面の再評価を通して、現代においてもなお支配的ともいえるエスノクラシー的国民国家をめぐる現状を批判する思想的可能性を探る。

3. 期待される成果

コンフリクトの問題を考える際にしばしば前提されやすいのは、その当事者集団の一体性である。しかし、そうした一体性はあくまで歴史的に構築されたイメージに過ぎず、それ自体がコンフリクトの解決をいっそう難しくしていることが少なくない。それゆえ、コンフリクトの起源や諸要因を正しく把握することにより、こうした固定的なイメージを払拭することが、当事者同士の対話関係の構築に向けて不可欠な作業となる。

イスラエル／パレスチナ紛争は、現代世界が抱えるもっとも困難なコンフリクトの一つであるが、本研究プロジェクトでは、紛争の一方の当事者であるユダヤ人社会内部に見られる対立、とりわけ、ディアスポラ・ユダヤ文化に内在的な原理であった「脱領域性」と、シオニズム運動が絶対視してきた「領土国家」の理想との間に見られるギャップを問題化する。これにより、「ユダヤ教＝シオニズム」という図式的理解や、イスラエル内外のユダヤ人が等しくイスラエル国家を支持しているといった社会的通念を刷新しうるとともに、ユダヤ対アラブという硬直した対立図式で捉えることで行き詰まっている中東問題に新たな解決の糸口を示すことが期待できる。

これまで、国内でも、ユダヤ研究者による共同研究会の試みがいくつか行われてきたが、シオニズムやイスラエル国家そのものを中心に論じる研究会はこれが初めてである。一方、アラブ世界やイスラム世界を軸とした中東問題をめぐる研究プロジェクトも複数の研究拠点で活発に行われてきたが、こうしたプロジェクトは、ユダヤ人社会内部の視点の分析やその批判的考察と突き合わせて初めて、コンフリクト研究としての真価が問われよう。この意味で、本研究プロジェクトは、対立を深めるユダヤ・イスラエル社会とアラブ・イスラム世界の相互関係に関する将来的な研究プロジェクトに向けた研究基盤を構築する上で不可欠のものであるが、同時に、中東問題をめぐる拠点横断的なプロジェクトとして「コンフリクトの人文学国際研究教育拠点」形成に貢献することは間違いない。

4. 平成 20 年度中に行なった主な事業

① 本研究プロジェクトに直接関係するもの

ワークショップ

■ 第一回公開ワークショップ（2008 年 7 月 27 日）

・ 報告1「帝国における自己呈示・・ロシア・シオニズムの「想像の文脈」におけるネーションとナショナリズム 」鶴見太郎

・ 報告2「19 世紀末から 1948 年に至るアメリカ・シオニスト運動の展開・・アジェンダ生成・確定をめぐる権力過程としての『アメリカ』と『パレスチナ問題形成』 」池田有日子

■ 第二回公開ワークショップ（2008 年 9 月 27 日）

・ 報告「リトアニア・ポーランド・ロシアのユダヤ人労働者総同盟・・「ブンド」におけるユダヤ民族主義の発展 」西村木綿(京都大学)

■ 第三回公開ワークショップ（2008 年 12 月 21 日）

・ 報告「ガリツィアは誰のものか」 野村真理

・ 特別講演 ″In the Name of Torah: A Century of Jewish Opposition to Zionism″ 「トーラーの名において・・ユダヤ教超正統派による反シオニズム闘争の 100 年」ヤコブ・ラブキン(モントリオール大学教授)

シンポジウム

■ 第一回公開シンポジウム 「ポスト・シオニズムかネオ・シオニズムか？・・ユダヤ「民主」国家イスラエルの虚像と実像」(2009 年 3 月 14 日)

・ 報告1「Ephraim Nimni 編『ポスト・シオニズムの挑戦』を読む」奥山眞知(常磐大学)

・ 報告2「ポスト・シオニズムの担い手、「新しい歴史学」の現在」金城美幸(立命館大学)

・ 報告3「アラビア語と「ネイティブ」の位置づけからシオニズムを考える」田浪亜央江(国際交流基金)

ディスカッサント:早尾貴紀、臼杵陽

司会:赤尾光春

② 本研究プロジェクトに間接的に関係するもの

セミナー

■ 「コンフリクトの人文学」セミナー第 16 回(2008 年 7 月 11 日)

・「イスラエルにおける捕囚・・ユダヤ教超正統派の反シオニスト・イデオロギーとその変容」赤尾光春

■ 「コンフリクトの人文学」セミナー第 25 回(2009 年 2 月 3 日)

・講演「パレスチナの二つの国家・・わずかすぎる、遅すぎる」ハイム・ブレシース (イースト・ロンドン大学メディア研究学科長)

・映画上映:『危険な状態』(State of Danger)

共催:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

シンポジウム

■ 「ディアスポラの力を結集する・・ギルロイ、スピヴァク、ボヤーリン兄弟」(2009 年 2 月 6 日)

・ 第一セッション・「ユダヤ・ディアスポラとブラック・アトランティックの出会う形」赤尾光春・、合田正人(明治大学)、浜邦彦(早稲田大学)

・ 第二セッション・「ディアスポラとサバルタンの位相」・本橋哲也(東京経済大学)、鵜飼哲(一橋大学)、上野俊哉(和光大学)、早尾貴紀

企画責任者:赤尾光春・早尾貴紀

主催:大阪経済法科大学アジア太平洋センター(CAPP)

③ 本研究プロジェクトに関連する個人業績

共訳

◆ 『ディアスポラの力・・ユダヤ文化の今日性をめぐる試論』ジョナサン・ボヤーリン、ダニエル・ボヤーリン、赤尾光春・早尾貴紀訳(平凡社、2008 年 6 月)全 417 頁

分担執筆

◆『ユダヤ人と国民国家――「政教分離」を再考する』市川裕、臼杵陽、大塚和夫、手島勲矢編（岩波書店、2008 年 9 月）283-318 頁（Ⅱ 政治と宗教の分離、第五章「イスラエルにおける捕囚・・ユダヤ教超正統派と反シオニスト・イデオロギーの変容」）

近刊予定

◇『ディアスポラから世界を読む』臼杵陽監修、赤尾光春・早尾貴紀編（明石書店、6 月刊行予定）

刊行準備中

◇『ディアスポラの力を結集する・・ギルロイ、スピヴァク、ボヤーリン兄弟』赤尾光春・早尾貴紀編

5. 今年度以降の主な事業計画

□ 打ち合わせ（7 月）：シンポジウム及び論文集の内容・人選等についての討議（メンバーの一部）

□ 中間報告（10 月）：シンポジウム参会者及び各執筆予定者による研究の進捗状況の報告（メンバー全員）

□ 第二回公開シンポジウム（2010 年 2 月）：フルペーパーの提出を義務づける

□ 原稿の最終締め切り（6月） → 編集作業

□ 論文集『シオニズムの考古学』の刊行（9 月～12 月）

6. 研究費科学研究費補助金の取得状況

研究代表者

・ 若手研究（B）「ユダヤ教超正統派における反シオニズム・イデオロギーの形成と変容」（平成 20 年度～22 年度）

研究分担者

・ 科研基盤(B)「ユーラシア・ユダヤ現代史の構築」代表：高尾千津子（平成 21 年度～23 年度）

・ 科研基盤(B)「イディッシュ語文化圏における芸術活動の研究」代表：圀府寺司（21 年度～25 年度）